

# 京都の 歴史ものがたり



監修 京都市小学校社会科教育研究会  
編著 「京都の歴史ものがたり」編集委員会

# 学童そかい

「京子、からだに気をつけて、先生のおっしやることをよくきくんだよ。」

「おかあちゃん、あいにきてね。」

「手がみをよこすんだよ。」

「いってきます。さよなら、さよなら。」

毎日のはげしい空しゅうで、日本の大きい町はつぎつぎばくだんでつぶされ、やけのはらとなりました。

「空しゅうから、子どもだけは守ろう。」

京都市の子どもたちをのせた汽車は、ばくげきの少ない京都府の北部のいなかの村むらへ、うつりすんだのです。

いなかのお寺の本どうなどに、町の子どもはおとうさんおかあさんのもとをはなれて、先生といっしょにくらし、いなかの学校へかよったのです。かなしいくるしいことでした。

「おかあちゃん、かえりたい。」



学童そかい(ばくげきの少ないいなかへうつった)



おいけどお 御池通りの家を取りこわしたあと

「おとうちゃん、むかえにきて。」

かなしくて、こつそりふとんのなかでないた子もたくさんありました。

小さい子も、なんでもじぶんでやらねばなりません。そのうえたべものもあまりありません。いなかの人やおともだちにはげまされて、京都の家にかえられる日をたのしみにがまんしたのです。

戦争がはげしくなると、中学生や女学生も工場へはたらきにいきました。わかい男の人は軍たいへ、ほかの男の人は軍じゆ工場へ、町はおとしよりと女の人と小さな子どもばかりになりました。

毎日たべるお米もなくなり、木の実、草の葉までもたべたのです。

着るものも、どうぐも、なにもかもなく、たのしみもなく、おそろしい戦争がつづきました。

そのうちに、京都の町を空しゆうや火さいから守るため、堀川・御池・五条などの大通りにするために、通りの家をごわすことになりました。町の人びとは、家につながるをつけ、ひっぱってごわしたのです。

## 京都の町におちたばくだん

昭和二十(一九四五)年一月十六日夜、空しゆうのとき、東山の鳥町ふきんに小さいばくだんがお

ち、町の人びとをおどろかせました。また、丸太町通りの北にもおとされたのですが、どちらも、あやまつておとしたといわれています。日本をこうげきしたアメリカ軍が、千年の都の京都は戦争中ものこしておいて、のちの世に役だてるようにしたのだそうです。

広島・長崎に原ばくがおとされ、とおといおおくの人の命がうしなわれ、戦争はおわりました。そ

れにくらべ、京都の町の人びとはめぐまれすぎているかもしれませぬ。それだけ日本のために役だたねばなりません。

表紙写真 / 平安神宮望楼 へいあんじんぐうぼうろう

# 京都の歴史ものがたり



250124610

京

り」編  
会

日本標準発行

21キ